『中東・イスラームのフィールドワーク』

堀内正樹

講義ノート（6）

～シナイ半島調査（その 2）～

こんにちわ。第 6 回目を始めます。今日はシナイ半島調査の続きです。前回はおもに調査の環境に関わるいわば外堀のような話でしたので、今日は何がわかったのか、そしてその理解に至ったプロセスについて考えてみたいと思います。フィールドワークの「報告」がいかにして出来上がるかということです。それでは説明の前にまず 2 本の「報告」を先に読んでください。ちょっと堅くて長い文章ですので恐縮です。

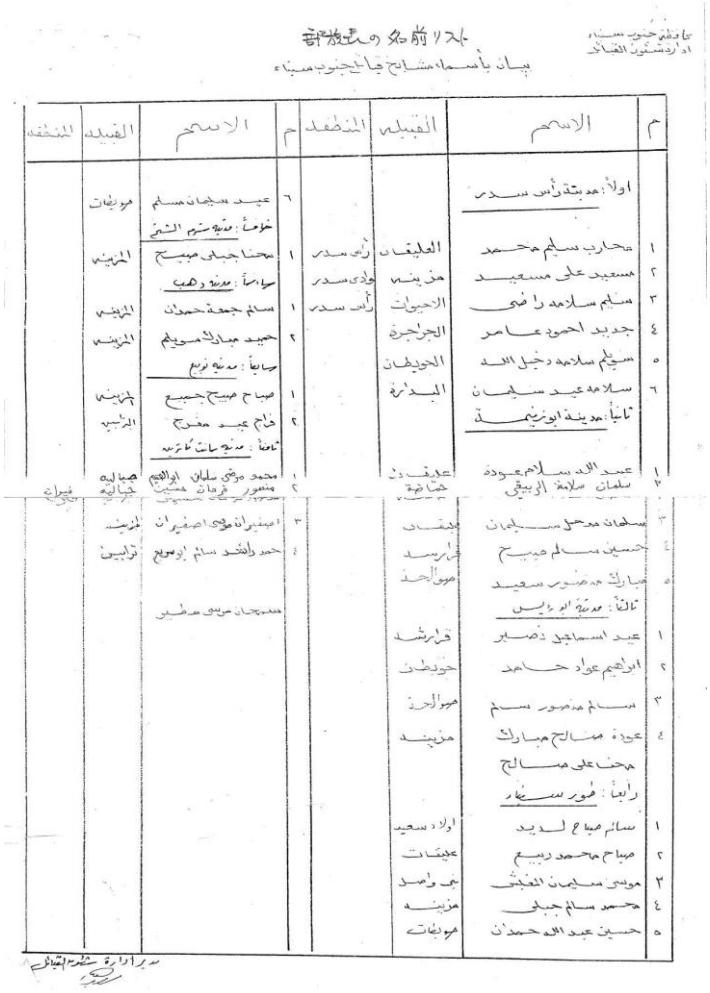
1 本目はシナイ半島に居住する部族の構成について、一次調査と二次調査に基づいて書いたものです《堀内正樹 1994 「シナイ半島のベドウィン社会」『イスラム圏における異文化接触のメカニズム III-人間動態と情報』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。pp.119-147》。

2 本目は聖者廟について（私は偉人廟と呼んでいますが)、墓制と参詣行動との関係から記述したものです《堀内正樹 2002 「沙漠に還る-南シナイにおける偉人の墓廟」『港をめぐる地域史・世界史の動態的研究』(川床睦夫編)、中近東文化センター。pp.101-127》。

私のシナイ半島調査の出発点になったのが、県庁部族課のヌール氏から見せてもらった彼のメモだったということは前回お話ししました。最初に入手したのが以下のような部族長（シェイク）のリストでした。族長の名前と部族名が居住地区ごとにまとめて書かれています。居住地区というのは南シナイ県（シナイ半島全体は行政的に北シナイ県と南シナイ県に分かれています）の主要な八つの町の名前で呼ばれています。ただしより詳しい居住地が記入されているのは 4 名だけで、そのほかはこの時点では不明でした。その後の私の調査の結果、部族長はこのリスト以外に数名多いことが判明しましたが、ヌール氏はどうやらあまり各地に出向くことはなく、県庁にやってきた族長たちから聞き取りをしたようなので、このような結果になっていたのでしょう。私はたったこれだけの情報で住所もわからずに部族長を捜し歩いたのですから、同行してくれた運転手のシャーキルの協力に負うところ大です。

このリストを初めて見たときまずホッとしたのは、これで南シナイにいくつ部族があって、どんな名前なのか見当がついたことですが、それと同時に驚いたのが、一つの部族に何人もの族長がいるということでした。これがいったいどういうことかはそのときの私にとっては謎で、その後いろいろな族長さんたちに聞くときの大きなテーマになったので

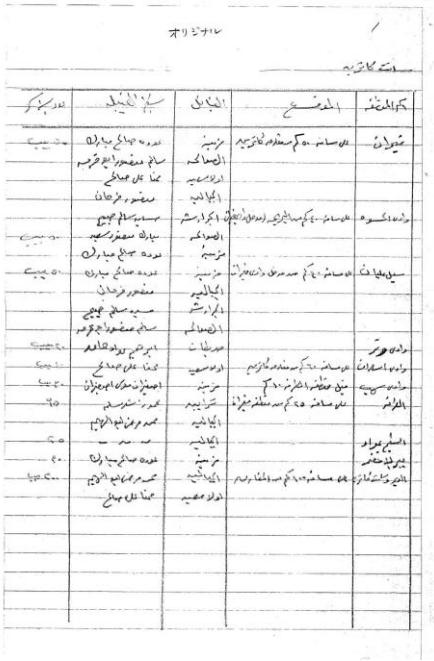
す。



部族長のリスト

ヌール氏からもらったもう一つの資料が、各居住地区内の町および集落（村）ごとの人口をメモした 3 枚の表と、各集落の場所名・詳しい位置・部族名・部族長名・戸数が書き込まれた 7 枚の表でした。これらも大いに役立ち、特に人口については、私自身が全集落を訪ねて調べ上げるなんていうことは物理的に不可能ですから、この数字を基本的な拠り所としました。この人口の表には 1985 年という日付がありますけれども、その後何度か修正したあとが見られますので、おそらく族長さんたちが県庁に来て話してくれるたびに修正・更新していったのでしょう。ずいぶん細かな数字が並んでいますが、もちろん人口なんて確定できるものではありません。出生・死亡による変動は毎日のようにあるわけですし、そもそも同じ集落にずっと住んでいる人のほうが珍しく、だいたいは数ヶ月もすればほかの場所に移っていったりすることがあとでわかりました。

集落ごとの人口など



地区ごとの集落名と戸数

というわけで、人口の数字と戸数の数字は、族長さんたちがその時点でヌール氏に語ったもので、きちんと調査したセンサスだと思うのは間違いです。ちなみに私が調査中に聞き出した数字はこれと異なることが多々ありましたし、集落の名前が違っていることもありました。それどころか、ここに書かれていた集落がもう消滅していたり、あるいは逆にここに書かれていない集落がいくつもあったりしました。

こうした統計的なデータはある時点を基準にしたものとふつうは受け取られるわけですが、実際には「どの時点」ということを決定できないばかりか、カテゴリーやカテゴリー内の要素にも大きな揺れが生じざるを得ないことを認識すべきでしょう。とはいっても、それでは「データ」にならないのですから、適当なところで「エイヤッ」と確定せざるを得ません。前回もいったように「データ」というものはなんらかの目的があって初めて作り上げられますから。目的を理解しておけばよいわけです。

ではヌール氏の目的とはなんだったのでしょう。もうそれを本人から聞き出すことはできませんが、彼が部族課の課長であったこと、それに族長たちが彼のもとを訪れたことから想像すれば、行政目的以外には考えられません。どこにどういう人たちがいるかというのは行政が抑えておきたいもっとも基本的な事柄です。しかし住居をしっかり構える定住民と違って、ベドウィンは基本的に簡単に移動する人々ですから、なかなか実態を掴むことはできません。そこでおそらくヌール氏は人（この場合族長）を通じてそれを掴もうとしたのだと思います。人がどこからどこへ移動していようと、人と人とのつながりを抑えておけばある程度まで全体像を把握することができるからです。

ヌール氏からもらったデータはその結果だったはずです。だから彼はいちいち各集落をまわって実地に調べ上げる必要はなかったでしょう。それを裏書きするような事柄を私は彼の資料の中から発見しました。上の右の表ですが、そこにはひとつひとつの集落について、そこに住む部族とその族長名が書かれています。しかし個々の集落ごとに族長が住んでいるわけはないので、その集落に住むそれぞれの部族の住民を管轄する（別の場所に住んでいる）族長の名前が書かれているのです。

こうしたことがわかったのは、しばらくしてからのことでした。私自身が何人もの族長やその縁者・知り合いなどとの邂逅を重ね、いろいろな会話を通してしかわからなかったのです。社会というものを捉えようとするとき、日本のように土地とか会社とか組織とかと紐付けて押さえようとするやり方を「属地主義」というならば、ヌール氏のように人と人のつながりを通じて押さえようとする方法を「属人主義」と呼んでよいでしょう。

さて先へ進む前にここでもう一度確認しておきましょう。データというのは揺れ動く時間やカテゴリーをいったん無理矢理止めて、いわばストップモーションをかけて提示するしかないものです。ですからそれは「暫定的」なものでしかあり得ません。何かきちんとした根拠になるものだとは決して思わないでください。じつは私が書いた「報告」も同様です。地図のときと同じように、ここでも「エイヤッ」で確定させたけれども、実際にはもっと曖昧で多義的で流動的なのが現実なのです。

ヌール氏がまったく着目しなくて、私が大いに関心を寄せたのは部族の内部構造です。社会人類学の分野では「分節体系(Segmentary System)」として、おもにブラック・アフリカを対象に長い研究蓄積のあるテーマです。これは要するに集権的な体制を欠く社会でいかに政治的秩序が保たれるのか、という問いに対する有力な回答でした。簡単に言えば、一つの部族なら部族が幾つかに枝分かれし、それぞれがさらに枝分かれし、さらに・・・と続いていって、全体としてはピラミッド型の構造になっていて、それぞれの枝分かれのレベルではいつも力の均衡が保たれているということになります。だから固定的な集団というものがなく、集団は状況に応じて伸び縮みし、結果的に決定的な分裂には至らない。この分節理論の代表者は 20 世紀半ばのエヴァンス＝プリチャードというイギリスの人類学者ですが、もっと遡れば、19 世紀の有名なオリエンタリストのロバートソン・スミスという人が古代アラブ社会を念頭にこの理論を提唱しました。以来アラブの部族社会全般がそうした構造を持っているのではないかとヨーロッパの研究者たちは考えてきました。

そこで、シナイ半島の部族にもこの分節体系があるのではないかというのが、私の当初の見立てでした。でもヌール氏は人類学者/民族学者ではありませんから、そんなことには無関心だったと思います。行政的には部族とその責任者さえ分かっていればいいわけですから、部族の内部構造についての情報はヌール氏のメモにはなくて当然ですね。ではということで、私は調査で歩き回るあいだずっとこの枝分かれについて聞いていったのです。結果と

してはそうきれいな形は見いだせなかったのですが、私を勇気づけてくれたのは、族長に限らず、どこへ行ってだれと話しても、この話題、つまり部族の枝分かれ状態については話が盛り上がることでした。地名のときと一緒で、自分の部族についてさえ、よく知っている人とあまりよく知らない人がいる。しかしそれにもかかわらず、ああじゃないか、こうじゃないかといった話は尽きることがありません。

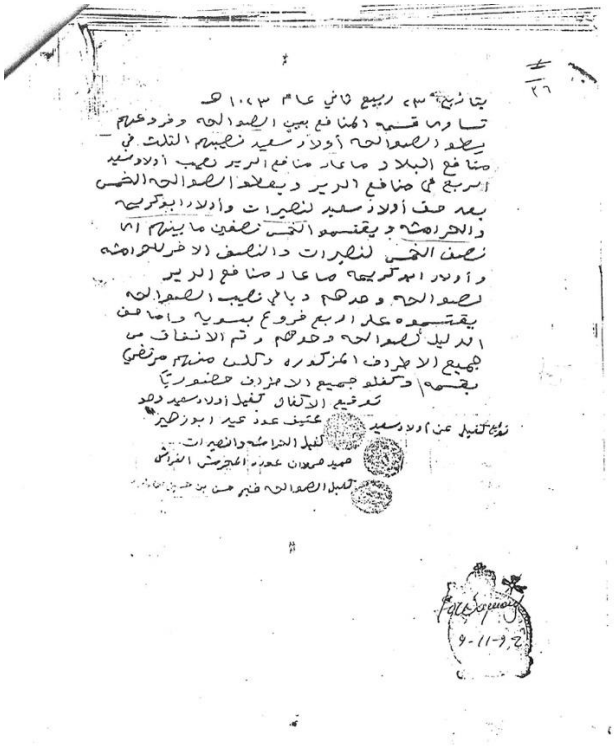
そして気づいたのが、枝分かれというのは即部族の歴史だということです。枝分かれ状態の説明は、そのまま歴史的経緯の話になります。ちょっと想像力を働かせてください。たとえば今日本には自民党、公明党、立憲民主党、国民民主党、共産党、社民党・・・といった政党があります。これだけでは面白くもなんともありませんよね。なんでそうなっているか。立憲と国民はもともと民進党というのが枝分かれしたのであって、民進党は民主党だった、その民主党はどうだった、こうだった。自民党という巨大な政党も元々は自由党と民主党が合体したものだった。あれ、自由党といえば小沢一郎でしょ。いやその自由党とは違うんだ。民主党って鳩山とか菅とかのあれか。いやそれとは名前は一緒でもまったく別物・・・。こうやって、現状の説明は即過去の経緯つまり歴史語りということになります。

そうすると、日本の政治史もそうですが、語る人によって認識は当然違ってきます。いろいろな「歴史」があるわけですよね。誤解や忘却も含めて、決して一つの定番の歴史なんてない。シナイの部族もそうでした。話はだいたいいつも盛り上がるのですが、決定版の部族史には至らない。

あるときサワールハという古い部族の族長さんと会ったとき、彼はサワールハ族の来歴と枝分かれをひじょうに明確に語ってくれました。もちろん録音しました。そして別れ際に彼が「今の話はこのあいだ県庁でも話したよ」というのです。ムムム・・・。再びヌール氏登場か！私は県庁に行ってヌール氏にそれとなく「部族の故事来歴を知りたいんですがねえ」と切り出すと、彼は自分のデスクの引き出しから束になった書類をおもむろに出してきて、ニヤッと笑っていわく「これだろ」。それが下の写真の書類です。こうしたものが約 40 枚ありました。いろいろな族長からヌール氏が聞き取った部族史に関する「覚え書き」です。ご丁寧に、聞き取った日付とその場に居合わせた人たち（証人？）の名前と押印があります。下の例では 1992 年 11 月 9 日となっていますから、私の第二次調査が終わったあとです。

こうやって歴史文書（文字記録）が成立するのですが、これで終わりではありません。その次にサワールハの族長に会ったとき、「あの話はだれから聞いたのですか」と聞いてみると、もう亡くなっただれそれ長老から聞いたとか、別のあの人から聞いたとか、そして「もしおまえがもっと詳しいことを知りたければナウーム・シュケールに書いてある」というのです。ナウーム・シュケールは前回すでに紹介したセント・カテリーナ修道院発行の『シナイの歴史』(1916)の著者です。その族長があの本を読んだとはとても思えないのですが、というのも彼は読み書きができなかったので、それでも大事なのは、いざとなったらそういう根拠というか証拠になる文字記録があるぞというスタンスです。文字記録というのは、そこに何が書いてあるのか知らないが、いざというときの拠り所として認識されているのです。

ヌール氏も自分の聞き書きにそれ（拠り所）を求めたのかもしれないですね。



ヌール氏の聞き書きの一部

さて、じつは話にはもっと続きがあるのです。私が族長に「あの本ならもう読んだよ」というと、「そうか。じゃ、『キターブ・ル・ウンム』だ」というのです。『キターブ・ル・ウンム』というのは直訳すれば「母の書」。あらゆる文書の源という意味です。セント・カテリーナ修道院に古くから所蔵されてきた部族関連の門外不出の古文書群をそう呼びます。ナウーム・シュケールもそれを根拠にしているはずだから、最終的にはそれを見よ、というのが族長の言い分だったのです。そういう認識はこの人だけでなく、どこの部族に行ってもどうやら同じように考えているようでした。そこに書かれていることが事実かどうか、正しいかどうか、というのは問題になりません。そういう確かなものがある、というだけでよいのです。

よく考えてみると、ベドウィンは皆イスラム教徒ですし、修道院はギリシア正教つまりキリスト教ですから、こうやって両者が依存し合ってきたというのは面白いものですね。ちなみにこの『母の書』は膨大な量らしいのですが、川床睦夫さんが苦労の末に修道院の許可を取って、すべてをマイクロフィルムに納めたはずです。私はまだ見ていませんが、世界的にも貴重な資料でしょう。

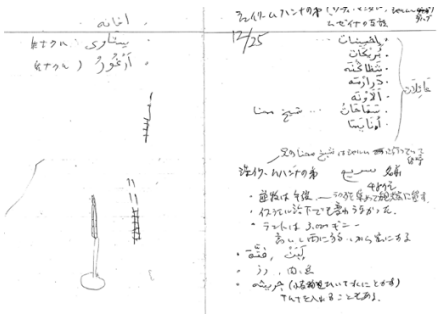
ところで、部族の分節構造とともに私が注目したのが聖者廟でした。ヌール氏はこれにはまったく関心を持っていませんでした。聖者廟についても私を勇気づけてくれたのは、この話題が盛り上がるという事実でした。分節構造と同じように、よく知っている人、知らない人がいるのはもちろんですし、人によって説明が違うというのもよくあることです。しかしどこへ行っても話が盛り上がるという意味で、ベドウィンにとって重要な事柄であるのは間違いありません。しかも結婚式や夏祭りなどに実際に参加してみると、そこには必ず聖者廟との関わりが浮上してきます。つまり社会生活を成り立たせる重要な構成要素だといえるわけです。

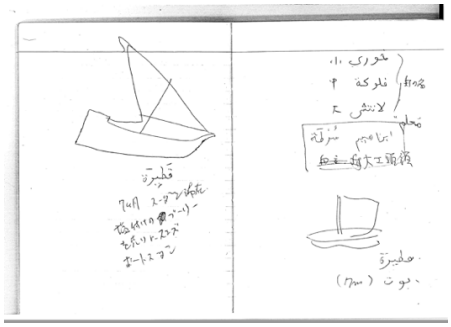
それだけではありません。その廟をだれが管理しているのかという段になると、部族の分節が登場してきます。分節というのは単に歴史認識とか雑談の話題にとどまらなかったのです。実際に廟の管理という目に見える場面で機能しているのです。さらにいうと、先ほどのナウーム・シュケールの本や族長・長老たちの昔語りの中でも結構頻繁に聖者廟が登場します。ただしそこで言及されるとき、ほとんどは場所を示す名前としてです。つまりとりとめのない砂漠の中で唯一固定した地理的指標としても重要なんですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

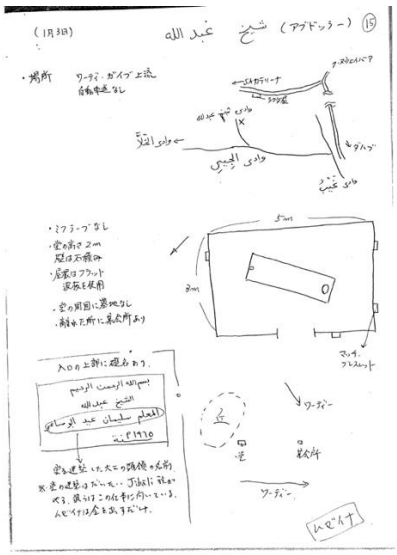
今日最初に読んでいただいた二つの報告は、こうしたプロセスを経て「エイヤッ」っとまとめた私の日本国内向けの「文書」（文字記録）です。ここで、実際に具体的な現場での調査からどうやって「エイヤッ」に至るのかの楽屋裏をご紹介しておきます。

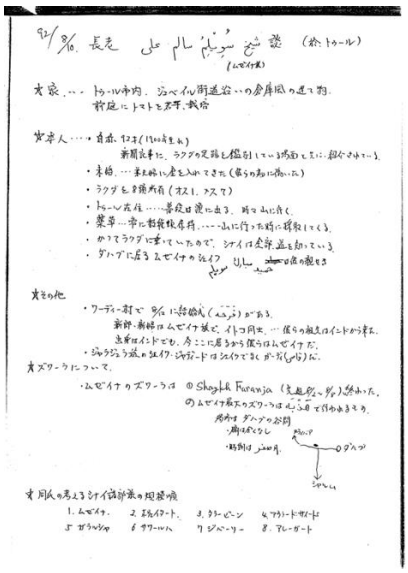
まず日々の現場では話をしながらメモをとりました。写真を撮ったり録音したりということもときにはもちろんしますが、そんなことをしているとせっかく話が弾んでいるのに途切れてしまったり、マイクを向けると話をやめてしまったりします。その点、目の前でノートに書き付けていると、それを相手に見てもらうことができます。そして相手は「それ違うよ、こういう形だ」とか「それはスペルが違う」とか「こういうこともある」とか「これとこれはこうつながるんだ」とか、話が続くばかりでなく、さらに膨らんでゆくメリットがあります。その代わり話題がいろんなところに拡散していきますから、内容的にはヒッチャカメッチャカになることもしばしばです。ちょっと具体例をいくつか下にお見せしましょう。





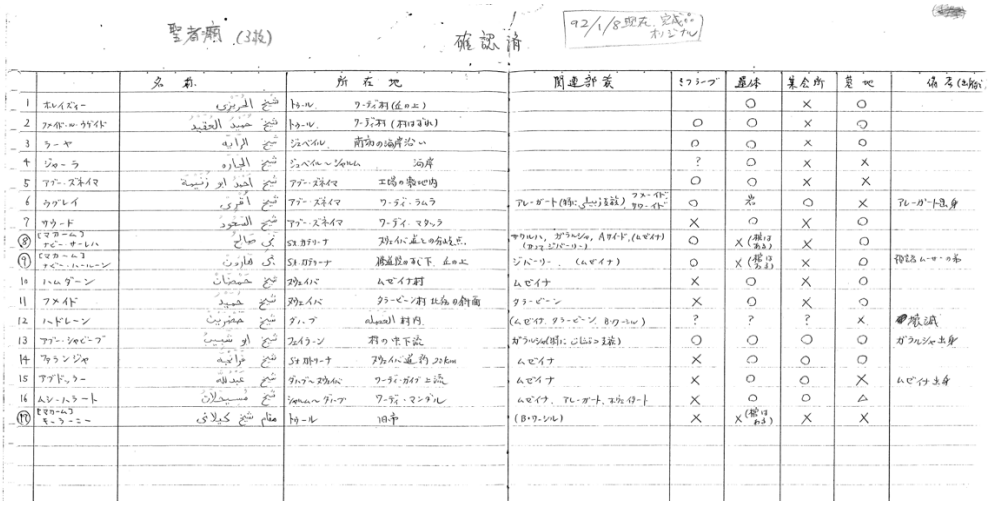
これらが要するにもっとも基本的なフィールドノートということになります。こうしたメモは、自分で書いたにもかかわらず自分で読めないこともあるし（笑)、他人が書いた文字や絵はまして読みにくいです。そこでまだ記憶があるうちに、読めるように清書しておく必要があります。その際別に、いつどこでだれと会ったかといった日誌をつけておく必要もあります。記憶はすぐにあやふやになりますから。また私の場合、清書に当たってはそのまま引き写すのではなく、ある程度話題別、テーマ別に整理して書きます。そうしないと何が何やらわからなくなりますし、のちのち他の情報と組み合わせようとするときに便利です。なお最近ではこうした作業はパソコンや電子ペーパーなどでおこなう人も増えていますが、都市部でならともかく、砂漠や田舎へ行くと、まだまだ大問題は電源です。ないんです。文明の利器も、充電できなくなったらただのガラクタです。またクラウドを利用できる WiFi 環境にあればひと安心ですが、自分のパソコンやメモリーカード、フラッシュメモリーなどに情報を保存する場合には、物理的な不安もあります。砂漠の細かい砂塵や猛烈な高温は想像以上に電子機器にとっては大敵です。保存情報が一瞬で飛んでしまったときの悲劇は容易に想像できますよね。電源なしの状況を考えて、カメラや録音機も、私はいまだに電池式を使っています。というわけで紙と鉛筆は手放せないわけです。以下に清書版の例をお示ししましょう。あまり変わらないか！でもこれでも自分ではちゃんと判別できるようにはなっているのですよ。





さて次の段階はどうなるでしょうか。私は幾つかの項目別に集計表を作ってみました。たとえば聖者廟についてみてみると、聖者廟一覧リストのようなものが出来上がります（下図 1)。この表の通し番号に写真と録音音源を紐付けておきます。次には集落ごとの一覧を作りました。集落名称、居住部族名、人口、戸数などの情報が書き込まれます（下図 2)。そして次に部族リストです。これには部族ごとに族長の名前と居住地と管轄集落、分節の名称、管理する聖者廟などが書き込まれます（下図 3)。

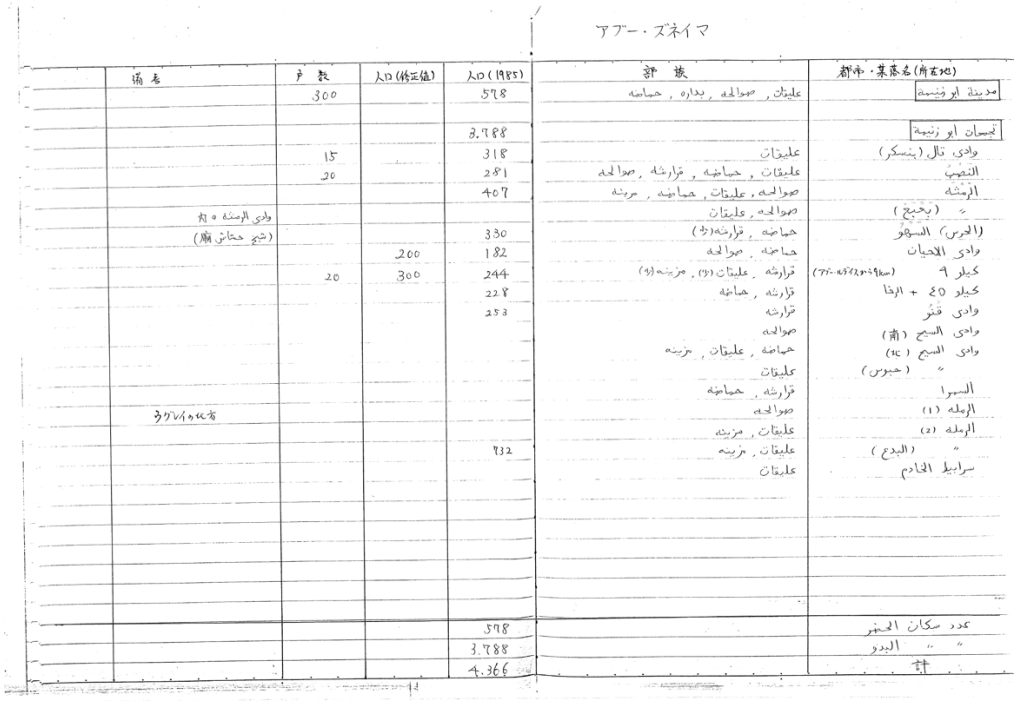
とりあえずここまでやっておくと、以降の調査が楽になります。基本的な手書きのデータベースが構築できたわけですから、以降は順次修正を加えてゆけばいいのです。私の場合、第二次調査終了時点でここまでは暫定版として完成しました。そしてお世話になったヌール氏にはこれらの資料をアラビア語で清書して、お礼にと手渡したのです。



聖者廟（3級）　確認済　92/1/8現在 完成 オッケー

		名前	所在地	関連部族	モスク	墓体	集会所	井戸	備考（土器）
1	ホレイズィー	شيخ الحريزي	トゥール　ワーディ村（広い）			○	×	○	
2	ファイド・ウ・ラケイド	شيخ حميد العقيد	トゥール　ワーディ村（村はずれ）		○	○	×	○	
3	ラーヤ	شيخ الراية	ジュベイル　南西の海岸沿い		○	○	×	○	
4	ジョーラ	شيخ الجياره	ジュベイル～ジョルム　海岸		?	○	×	×	
5	アブー・ズネイマ	شيخ أحمد ابو زنيمة	アブー・ズネイマ　工場の東の丘		○	○	×	×	
6	カグレイ	شيخ أقرى	アブー・ズネイマ　ワーディ・ラムラ	アレーガート（時：ジェベル王族）　ファーイド　ヌウ・イド	○	光	○	×	アレーガート土器
7	サウード	شيخ السعود	アブー・ズネイマ　ワーディ・マタムラ		×	○	×	○	
⑧	ミマカーム アビー・サーレハ	نبي صالح	SIA ガテーナ　ヌウェイバ盆地との分岐点	サウルハ，ガラムシル，Bサイド，（ムゼイナ）（カラエ・エバビーリー）	○	×（跡はある）	×	○	
⑨	ミマカーム ナビー・ハールーン	نبي هارون	SIA ガテーナ　盆地西の下　丘の上	ジバーリー　（ムゼイナ）	○	×（跡はある）	×	○	現在ムーサ・の墓
10	ハムダーン	شيخ حمدان	ヌウェイバ　ムゼイナ村	ムゼイナ	×	○	×	○	
11	フメイド	شيخ حميد	ヌウェイバ　タラービーン村 北端の斜面	タラービーン	×	○	×	○	
12	ハドレーン	شيخ حضرين	ダハブ　alwadi 村内	（ムゼイナ，タラービーン，Bワーシル）	?	?	?	×	廃墟
13	アブー・シャビーブ	شيخ ابو شبيب	フェイラーン　村の中下部	ガラハシル（時：ジェバエル王族）	○	○	○	○	ガラハシル土器
14	ウランジャ	شيخ قرانيه	SIA ガテーナ　ヌウェイバ盆地約 2.5km	ムゼイナ	×	○	○	○	
15	アブドゥラー	شيخ عبدالله	ダハブ～ヌウェイバ　ワーディ・ガイド上流	ムゼイナ	×	○	○	×	ムゼイナ土器
16	ムシ・ハラート	شيخ مسيحلان	ジョルム～ダハブ　ワーディ・マンダル	ムゼイナ，アレーガート，エルイラート	×	○	○	△	
⑰	ミマカーム モーラニー	مقام شيخ كيلاني	トゥール　旧市	（Bワーシル）	×	×（跡はある）	×	×	

図１　聖者廟リストの一部



アブー・ズネイマ

備考	戸数	人口（修正値）	人口（1985）	部族	都市・集落名（所在地）
	300		578	علیقات，صوالحه，بداره，حماضه	مدينة ابو زنيمة
			3,788		
					نجيسان ابو زنيمة
	15		318	علیقات	وادي تال（ينسكر）
	20		281	علیقات，حماضه，قرارشه，صوالحه	النصب
			407	صوالحه，علیقات，حماضه，مزينه	الرمثه
				صوالحه，علیقات	〃（ريخيع）
村の Wadi الرمثه					（الدرس）السهو
（شيخ حجاج 廟）			330	حماضه，قرارشه（少）	وادي اللحيان
		200	182	حماضه，صوالحه	
	20	300	244	قرارشه，علیقات（少），مزينه（少）	كيلو 9（アブー・ズネイマから9km）
			228	قرارشه，حماضه	كيلو 40 + الرخا
			253	قرارشه	وادي قنو
				صوالحه	وادي السيح（南）
				حماضه，علیقات，مزينه	وادي السيح（北）
				علیقات	〃（حبوس）
				قرارشه，حماضه	السمرا
				صوالحه	الرمله（1）
ラクダ飼育者				علیقات，مزينه	الرمله（2）
			732	علیقات，مزينه	〃（البدع）
				علیقات	سرابيط الخادم
			578		都市の人口
			3,788		〃 〃 ベドウ
			4,366		計

図２　地区情報の一部

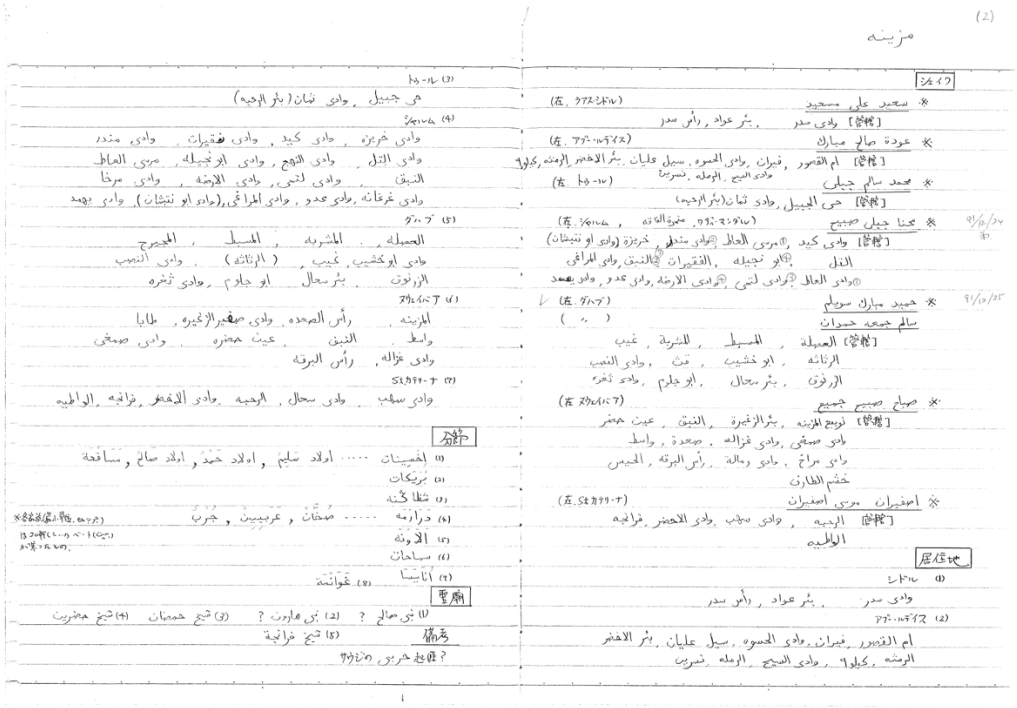


図 3　部族情報の一部

{後日談}　2000 年前後にある日本人の研究者がトゥール・ハウスを訪ね、ベドウィンについての基本情報を入手したいと県庁へ行ったのだそうです。そして部族課で「それならいい資料がある」といって見せてもらったものがあった。すごい資料があると喜んで、それをトゥール・ハウスへ持ち帰り、川床睦夫さんに見せたのだそうです。川床さんはそれを見ているうちに「どこかで見覚えのある筆跡だなあ。あ、堀内さんじゃないか」となったのだそうです。まるで笑い話ですね。ヌール氏が異動で去ったあとも、私の資料が後任者たちに引き継がれていたということでしょう。ただひとつ気になっているのは、前回もちょっと触れましたが、その後の「対テロ戦争」に際してベドウィンの族長たちがテロリスト幇助の嫌疑でエジプト政府に逮捕・拘留されたとき、もしかしたら私の資料が使われたのではないかという心配です。それだけの情報価値はあると私は思っていますから。後悔というものはいつまでも付きまとうものですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さて最後に、フィールドワークの「報告」というものはいったい何なんだろうか、ということを反省的に考えておこうと思います。人によって言うことが違う、この前言ってたことと今言っていることが違う、言うこととやることが違う。当たり前ですよね。

-----でもそれでは報告（文章、文字記録）にはならないから、最低限嘘にはならないことを念頭に置きつつ良心的に「エイヤッ」っと「事実」を固める。そうしてで

きた「事実」の断片を集めて、足りない部分は土器を破片から復元するときの石膏のような感じで空白を補い、全体像を提示する。そうすれば読む人は「理解」し、納得してくれる-----。

こういうことを考えたことがかつてありました。じつは今日読んでいただいた2本の報告にもまだそうしたスケベ心がちらほら出ています。問題はどこにあるのでしょうか。「事実」と「全体像」です。社会なるもの（文化なり国家なり民族なりでもいいです）がなにかまとまりをもった事実あるいは実体であると思いたい人に対してはこの戦法は有効です。しかし、事実なんてあるといえばたくさんあるし、全体なんてあるわけがないだろうと考える人（私がそうです）にとってはしらじらしいだけです。しかしこうした前者のような方法論的全体主義（Theoretical Wholism）は、20世紀半ばまではほとんど自明のこととして研究者なる人種には受け入れられていただけでなく、今でも結構それを疑うことのない人たちもいるのです。では「それじゃだめだ」となったとき、どういう報告（民族誌）が書けるのか。それについては次回以降モロッコでのフィールドワークをお話しするときに考えてみることにしましょう。

ともあれ、現場で書き取ったフィールドノートを埋めているたくさんのバラバラな事柄の多くは「報告」には拾い上げられずに、放置されたままになっています。音楽のこと、魚取りのこと、造船のこと、菜園の作り方、薬草のこと、料理や食材、排便のしかた、下ネタ、噂話・・・。若干は報告の中で触れることもありましたが、ほとんどは手つかずです。こうした事柄は本当はひじょうに豊かな情報なのですが、あまりにも具体的かつ個人的であるためにテーマ化するのが難しいのです。テーマ化されることも確かにあるにはあるのですが、その場合、構造主義のようなかなり抽象的な議論のネタとして使われることが多いですね。

こうしたジレンマはシナイ調査に限らず、他でもいつも経験してきました。残念なことに、こうした豊かな事柄は「残余経験」のほうに入ってしまうんですよね。ではなぜこうした事柄が私にとって大事かと言えば、話が盛り上がるからなんです。部族分節にしても聖者廟にしても理由は同じでした。私が重要視してきたのは、そこの人たちが関心を寄せている事柄なのです。そして私も含めた場で、ああじゃないか、こうじゃないかと言い合える事柄なのです。

構造主義的な抽象論などは、現場に戻すとだれも盛り上がらないと思いますよ、やったことないからわからないけど。人類学の分野では、現地の人々にとってあまりにも当然のことや意識にも上らないようなことを「Covert Culture」（隠れた文化）といって重要視することがありますが、それは人類学者にとっては意味のあることでしょうが、現地の人たちにとっては面白くもなんともないことになります。また現地の人々が語りたがらないこと、隠しておきたいことも重要だという人がいます。これもヘンですね。それを暴いてい

ったい何になるのでしょう。主人公はいったいだれなのかということを考えれば答えは自ずから明らかだと思います。まあ今日はこのくらいにしておきましょう。

＊シナイ調査の機会を与えていただいた川床睦夫さんが 2 年前に亡くなりました。残念なことです。大きな損失でした。合掌

おわり